

寄稿

「ハンセン病～『人生(いのち)』を奪われた人たちからの問いかけ」

夏空を震わせて

白樺の幹に鳴く蝉に

おじぎ草がおじぎする

包帯を巻いた指で

おじぎ草に触れると

おじぎ草がおじぎする

指を奪った「らい」に

指のない手を合わせ

おじぎ草のようにおじぎした

これは、ボクの尊敬するハンセン病回復者、桜井哲夫さんの「おじぎ草」と題する詩です。桜井さんは二〇一一年の十二月二十八日、群馬県草津町にあるハンセン病療養所「栗生楽泉園」で八七歳の生涯を閉じました。残念ながらボクは桜井さんの末期のひと時に立ち会うことができませんでした。しかし、翌年五月に故郷青森で行なわれた納骨式には参列させていただきました。

言うまでもなく、と書きたいところですが、ハンセン病問題についての理解はまだまだ不十分です。ハンセン病は、「らい菌」という極めて微弱な病原性細菌によっておこる慢性の感染症で、今日の日本では、ほとんど感染しないといっても過言ではありません。しかしながら、かつてはハンセン病を「非文明病」「日の丸の汚点」と喻え、また「民族浄化」「社会を病氣から守るため」など

と理由をつけて、一九〇七年から九六年までの八九年間にわたって、患者の強制隔離を継続してきました。

そのため、一般住民もその誤った情報を鵜呑みにして、地域に住む患者の存在を密告、排除し、結果的に差別に加担してしまいました。まさに信じ難いほどの、人を人とも思わぬ非道残酷な差別行為が国策の名のもとに罷り通りました。冒頭に紹介した桜井さんも本名は「長峰利造」です。家族を差別から守るために偽名を名乗らざるを得なかったのです。また、子どもを産むことも許されませんでした。子孫を残させないように、断種や不妊手術を強制されてしまったのです。しかし医療体制が不備で中には手術が失敗して子どもを授かった人もいたのですが、結局、療養所職員に見つかって堕胎を強いられました。

さらに、療養所の園長には懲戒検束という警察権まで認められていましたから、たとえば人間らしい暮らしがしたいと、少しでも異議を申し立てると、所内に設置された監禁室に拘束されたり、秘密裏に草津の療養所に造られた「重監房」に入れられたりしました。そこでは一九三八年から四七年までに九三人が投獄され、そのうち三人が、マイナス十五度の厳寒の冬期に、ある若

者は「千からびたカエル」のように、またある人は精神を患って死んでいきました。

今も全国の十三の療養所には一八五〇人ほどの人が生活しています。平均年齢は八三歳で、みなさん病氣は回復しているのに、帰るべき故郷を失い、療養所を終の棲家と心を定めた人たちです。その一人ひとり、計り知ることができない、幾千もの眠れぬ夜の想いを呑みこんで、今この時を過しておられるのです。その多くは最期は所内の納骨堂に入ることを決めておられて、桜井さんのようなケースは稀だと聞きます。

桜井さんが詩を書くようになったのは五〇歳を過ぎてからです。目が見えず、指も不自由なので舌で点字を読んで学びました。ボクは生前に四回しか逢っていないのですが、その度にさり気ない気遣いでボクを迎えてくれました。そんな桜井さんも所内で断種を強制され、手術の失敗で娘さんを授かったのですが、その尊い命を奪われました。翌年にはお連れ合いにも先立たれています。桜井さんの顔には、そんな地獄の日々が、ハンセン病の重い後遺症とともに深く刻まれています。それでも、桜井さんは「ありがとう」と「おじぎする」のです。なぜなら、「問

違った国策は許せないけれど、こうして高石さんに逢えたのも、ぼくがハンセン病を生きてきたからでしょう」と答えられました。では、排除してきた側のボクたちは何を学び、今どこに立っているのでしょうか。



たかし のぶと
高石 伸人さん
プロフィール

NPO法人ちくほう共学舎「虫の家」事務局長。九州龍谷短期大学及び筑紫女学園大学非常勤講師。1949年生まれ。大学卒業後、(社福)直方市社会福祉協議会ソーシャルワーカーを経て、1997年から2008年3月まで九州龍谷短期大学教授。かたわら1986年から自宅敷地内で、障害者地域活動センター「虫の家」を共同運営。その一角に2008年から「杉野ハンセン病資料室」を開設した。著書に、『水俣50年―ひろがる「水俣」への思い』（作品社、共著）、『「新優生学」時代の生老病死』（現代書館、共著）など、論文に「証言…へらい予防法」を生き「閉塞する死」『商品化社会』の精神に関する一考察」他がある。福岡県小竹町在住。